



トピックス

第41回（平成14年度）下中科学研究助成金が三島伸治会員（東和大付属東和高校）に贈られましたので，編集委員会では研究内容の執筆をお願いしました．

ヨモギホンヤドカリの生物地理と生活史

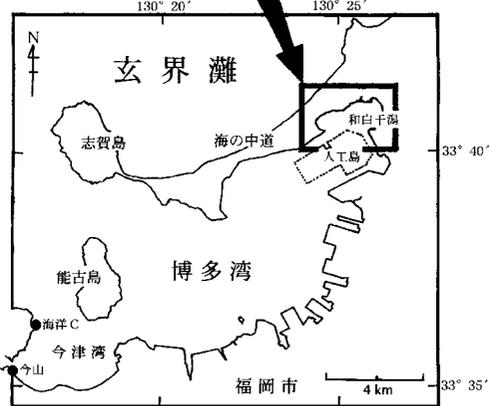
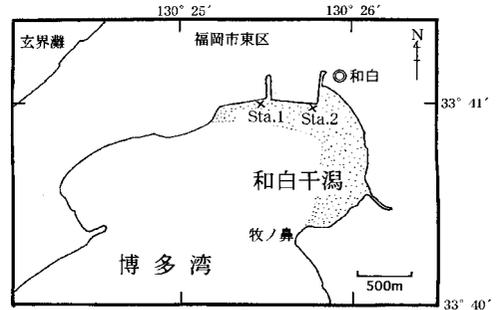
東和大学附属東和高等学校
三島伸治

1 はじめに

ヨモギホンヤドカリ *Pagurus nigrofascia* Komai, 1996 は我が国の海岸の潮間帯に生息する小型のヤドカリである．Komai (1996) は本種の採集地に関して，タイプ産地である函館湾では1年を通して潮間帯で普通であるが，それ以外では和歌山，熊本県天草のみで，冬季から春季に限り比較的希に採集されると述べている．海外の産地は知られていない．筆者は1997年1月と2月に，博多湾東部の和白山干潟（図1のSta.1およびSta.2）で採集した計2個体のヤドカリを *P. nigrofascia* Komai, 1996 と同定し（三島，1997），同年3月には和白山干潟南端の牧ノ鼻の転石の下に本種が多数生息していることを発見し，さらに1998年の3月には博多湾の西に位置する今津湾（図1の海洋Cおよび今山）でも多数の生息を確認した（三島，1998）．本種は全体に緑色であり，歩脚には赤茶色の小斑が散在し，指節の基部に黒帯（図2の矢印）がある．貝殻の中に入っても，ハサミや歩脚の先端のオレンジ色が見えるので，肉眼でも他種と容易に区別できる．

このように，本種は函館湾や博多湾では普通であるが，1996年の原記載からまだ日が浅く，未だ全生息域が把握されていない．筆者が知る限り，図鑑に取り扱われた例はなく，知名度は低いようである．

しかし，本種は以下に紹介するように，他の多くのヤドカリとは際立って異なる生活史をもち，興味深い点が多い．そこで本稿では本種の生物地理および生活史についてこれまで明らかになったことと今後の研究課題につ



【図1】福岡におけるヨモギホンヤドカリの生息地
海洋C＝福岡県水産海洋技術センター三島（1997）より改変



【図2】ヨモギホンヤドカリ
Pagurus nigrofascia Komai, 1996
2003年5月9日，牧ノ鼻で採集の雄，
SL（盾長）=4.7mm
矢印は歩脚の指節基部の黒帯を指す
（スケールは4mm）

いて述べてみたい。

2 生物地理

本種は多少とも内湾的な海岸の、砂地に転石が載っている場所に生息している。福岡での発見に続いて、秋田県男鹿半島周辺、三重県鳥羽でも確認された（和田哲，私信）。さらに今年（2003年）4月，筆者は長崎県の大村湾の湾口部および湾奥部で多数の個体を採集した。このことから，筆者は本種が大村湾全体に広く分布し，そして九州の北岸から西岸にかけて，本種の一大個大群があるのではないかと考えている。さらに調査を行っていけば，海外を含むより広い範囲で生息地が見つかる可能性が高いが，分布域全体の把握にはまだ時間がかかりそうである。

3 生活史

ホンヤドカリ属の繁殖に関する生活史は近縁のタラバガニ科などに比べ，種間変異が顕著である。年間の産卵回数でもタラバガニ科の種では年1回型であるのに対して，ホンヤドカリ属では年1回型と年多回型とが知られている（和田，2000）。本種は年1回型であり，函館湾では5月に産卵する。そして9 - 10ヶ月にもおよぶ長い抱卵期間を経て翌年の2 - 3月に幼生を放出する（Goshima *et al.*, 1996）。この長い抱卵期間は同属他種に例のない特異的なものである。

函館湾では幼生の餌資源（プランクトン）が早春に最も豊富と考えられ，これが本種の幼生放出の時期と一致している。しかし低緯度温帯域にあり，餌資源の季節性が不明瞭と考えられる福岡では，年1回型は年多回型よりも着底量が少なくなるため，年多回型と共存するのは困難と予想されていた（和田，2000）。しかし筆者は牧ノ鼻において，本種がコビナガホンヤドカリ *P. dubius* (Ortmann)，ホンヤドカリ *P. filholi* (De Man)，ケアシホンヤドカリ *P. lanuginosus* de Haan と共存していることを確認した。これら3種はいずれも年多回産卵型の生活史を持っている。1997年の11月から1998年の1月にかけて，筆者は牧ノ鼻で本種の簡単な調査を行い，11月の後半から1月上旬までの間に幼生の放出が行われていることを示唆するデータを得ている（三島，1998）。

そこで2001年1月より高知大学海洋生物教育センターの和田哲博士の協力を得て，牧ノ鼻個体群について予備調査を開始した。その結果，牧ノ鼻でも函館湾と同様に成熟雌は年1回産卵し，産卵の最盛期は3月であり，幼

生の放出は晩秋から冬季であった。さらに本種は秋から春にはコビナガホンヤドカリやホンヤドカリとほぼ同所的に潮間帯中部で観察されたが，夏季には潮間帯上部の転石下で密集して分布することが発見された。他の地域でも夏季には他の季節の分布域で発見されないことから（Komai, 1996；和田哲，私信），本種は夏季に休眠している可能性も示唆される。このことが他のヤドカリに比べて分布情報が少ない一因かもしれない。しかし，本種の特異な生活史は未だに全容が明らかにされておらず，より詳細な調査が待たれている。

4 今後の展望

この度，筆者は第41回（平成14年度）下中科学研究助成金をいただいた。これを機に，本種の分布域の季節変化と詳細な生活史を解明するために，今年（2003年）3月より毎月1回，牧ノ鼻でライトランセクト法を用いた定量的サンプリングをおこなっている。これまでのところ，1回の産卵数が平均して300 - 400個程度と，Goshima *et al.* (1996) の函館での調査に比べ，明らかに多い傾向が出ている。しかし調査はまだ始まったばかりであり，さらに多くのデータを蓄積して，産卵および幼生放出，幼生の変態と新規加入の時期，繁殖に参加する雌雄の体サイズ，餌資源や貝殻資源などをめぐる同所的な他のヤドカリとの関係や季節的移動などを明らかにしたい。また，今後さらに多くの生息地を発見し，それらの場所の同所性種群の種組成を解明することによって，本種が生息するための条件を検証したい。将来的には本種の卵の長い休眠期間にはどのような意義があるのかを明らかにしたい。

5 謝辞

本研究に対し，日頃から御指導，御協力を賜り，また本稿作成にあたっては多くの御助言をいただきました高知大学海洋生物教育センターの和田哲博士に心から御礼申し上げます。

参考文献

- Goshima S., Wada S., and Ohmori H. 1996. Reproductive biology of the hermit crab *Pagurus nigrofascia* (Anomura: Paguridae). *Crustacean Research*, No. 25: 86-92.
- Komai, T., 1996. *Pagurus nigrofascia*, a new species of hermit crab (Decapoda: Anomura: Paguridae) from

Japan. Crustacean Research, 25: 86-92.

三島伸治 1997 ヨモギホンヤドカリを和白山濁で採集
CANCER 第6号 p19-21.

三島伸治 1998 福岡のヨモギホンヤドカリ CANCER
第7号 p9-11.

和田 哲 2000 ヤドカリ類の生活史進化 Bulletin of
Marine Sciences and Fisheries, Kochi University 第20
号 p1-13.

本部より

「Zoological Science」の国際学術情報流通基盤 整備事業 (SPARC / JAPAN) への参画について

現状

(社)日本動物学会が刊行している Zoological Science (Z. S.) は、今年ですでに刊行されて20年が経ち、当初の年間6号から今では年間12号の毎月発行になり、また、J-STAGE (科学技術情報発信・流通統合システム)(注1)を通してインターネット上で公開することにより、国際誌として国内外で広く読まれるようになってきました。科学技術振興事業団 (JST) が事業団内に構築したこのシステムは、利用学協会による学会誌や論文誌のオンライン化等、これら機関の世界に向けた情報発信をサポートすることがその目的です。私達の日本動物学会もこの電子出版システムを利用して、現在発行中の Z. S. を容易にかつ低コストでオンライン化し (注2)、J-STAGE のホームページで閲覧、検索、PDF ファイルのダウンロードなどを可能にただけでなく、PubMed に引用されることによってインターネット上の文献検索システムからもリンクされ世界中の人に広く読まれています。

新しいシステムによる Z. S. の刊行

日本発の電子的な学術雑誌の育成をさらに推進するために、今年度から国の支援のもと、国立情報学研究所 (NII)(注3) がイニシアティブをとる「国際学術情報流通基盤整備事業」が始まります。この事業は、学会 (学会誌) が J-STAGE を活用して学術研究の成果を発信することにより、国内外の研究者、学会、大学図書館等と国際的な連携が築かれ、さらなる学術研究の活性化が可能になるように、これら機関とのパートナーシップのもと、様々な面から情報発信をサポートする機能的なプラットフォームを構築することを目的としています。

例えば、編集、査読システムの国際化の支援や、サイトライセンスを活用した電子ジャーナルの販売促進等、具体策をもって、学会や図書館また J-STAGE の活動を支援するいわばエンジンのような役割を果たすことが期待されています。

この事業は SPARC / JAPAN と呼ばれています。それは、これによく似た SPARC “ Scholarly Publishing & Academic Resources Coalition ” (学術出版連合)(注4) と呼ばれるシステムが、全米図書館協会 (ARL) の後援により、1998年に米国で創設されているからです (注5)。このシステムは今では大きく発展し、SPARC / EUROPE も2001年には立ち上がっています。このような生物学系学協会、SPARC、図書館連合、出版社等からなる雑誌の刊行パートナーシップの成功例として、BioOne (注6) が知られています。この組織は、生物系の多数の雑誌をパッケージ化して図書館などに提供しており、経済的にもすでに自立していることで有名です。電子出版へのこのような一連の動きは、今後ますます強まることはあっても、決して後退することはないでしょう。

日本動物学会の理事会では、この SPARC / JAPAN に加入することによって、Z. S. を国内外の研究者に今まで以上に容易に利用でき、かつ時代に対応し、より国際的な電子ジャーナルに育て上げ、同時に、科研費補助金に過度の依存をしない財政的にも健全な学術誌出版を行っていきたいと思っています。

この SPARC / JAPAN は今、現実にかつ着実に動き出しており、ここに加わることによって、世界に向かって情報を発信する日本の学術誌として Z. S. がイニシアティブをとる非常によいチャンスが生まれると考えています。明治以降120年以上の歴史と実績を持つ日本動物学会が他の学会と協力しながら現代科学の発展に新しい視点で大きく寄与したいと思っています。会員の皆様方には、今後とも Z. S. の刊行がスムーズに進み、学会員に負担をかけることなく国際誌として発展することができるように、この新しい Z. S. 刊行システムである SPARC / JAPAN への加入をお認めいただき、御協力をお願いいたします。

(社)日本動物学会
会長 浅島 誠

(注1) <http://www.jstage.jst.go.jp/ja/>

(注2) <http://zsj.jstage.jst.go.jp/en/>

(注3) <http://www.nii.ac.jp/index-j.html>

(注4) <http://www.arl.org/sparc/>

(注5) SPARC / JAPAN 構想に深く関わってこられた千葉大学教授・土屋俊先生(前・千葉大学附属図書館長)の解説が6月4日発行の朝日新聞科学欄に載っております。ご覧になって下さい。

(注6) <http://www.bioone.org/>

公開学術講演会

「三宅島の自然と復興 - 現状とこれから - 」 開催のお知らせ

日本動物学会主催, 朝日新聞社・日本植物学会などの後援で, 公開学術講演会「三宅島の自然と復興 - 現状とこれから - 」を平成15年7月12日(土)に立教大学池袋キャンパスで開催します。2001年1月20日に「どうなる, 三宅島の自然?」を東京都との共催で開催し, その後平成12年度, 13年度には動物学会が東京都から三宅島の自然動植物調査を委託され, 実施してきました。調査結果は年次大会でポスター発表をしてきましたが, 今回, 総まとめとなる報告会を開催することになりました。プログラムは以下の通りです。

「三宅島の自然と復興 - 現状とこれから - 」

平成15年7月12日(土) 13時~

立教大学池袋キャンパス 7号館 7102教室

無料

「はじめに」

浅島 誠(日本動物学会会長, 東大大学院総合文化)

「2000年噴火の特徴と火山活動の今後」

大島 治(元・東大大学院総合文化)

「噴火とともに生きてきた植物たちの3年間」

上條隆志(筑波大農林学系)

「噴火による鳥類相の変化と予想される回復過程」

加藤和弘(東大緑地植物実験所)

「三宅島の産業復興の現状と課題」

海野義明(オーシャンファミリー海洋自然体験センター)

総合討論

司会 樋口広芳(東京大学大学院農学生命科学研究科)

問合先: 東京大学海洋研究所 窪川かおる

電話03-5351-6487 FAX 03-5351-6488

E-mail zoology@ori.u-tokyo.ac.jp

動物学歴史資料保存委員会からのお願い

動物学歴史資料保存委員会委員長 玉手英利

動物学歴史資料保存委員会では, 日本動物学会が115年にわたり刊行してきた学術誌に関するインデックスデータベースを作ることを, 計画しています。

日本動物学会の学術誌の歴史は古く, 1888年に発刊された和文誌の動物学雑誌(Zoological Magazine)と, 1897年発刊の欧文誌である日本動物学彙報(Annotationes Zoologica Japonenses)に遡ります。現在のZoological Scienceは, 動物学雑誌と日本動物学彙報を統合した新たな欧文誌として1984年に刊行されました。これらの学術誌には, 日本の動物種に関する原記載や, 往時の生物相に関する記述など, 貴重な情報が含まれています。

動物学雑誌と日本動物学彙報は, 画像情報の電子化が完了しています。これらの学術誌の情報を有効に利用するために, 動物学歴史資料保存委員会では, 平成15年度科学研究費補助金研究成果公開促進費(データベース)の助成をうけて, 2次情報データベースを作成することになりました。

データベース化は委員会がおこないますが, 私たち委員の専門分野は限られておりますので, 学会員の皆様から御助言をいただきながら作業をすすめたいと考えております。どうか, よろしく御協力くださいますようお願いいたします。

生物科学学会連合 第9回連絡会議報告

2003年5月15日(木)午後2時より4時半まで, 生物科学学会連合事務所(学会事務センター内)にて, 日本遺伝学会の石和貞男会長が世話人となり, 生物科学学会連合第9回連絡会議が開催されましたので, ここに報告致します。

事務局の山口哲男氏による前回の議事録の確認の後, (社)日本動物学会教育担当理事の松田による生物科学学会連合が文部科学省に提出した「生物関連教科書の検定に関する意見書」についての報告(生物科学ニュース

2003年3月号7頁参照)があり、その後、審議に入った。

議題1．生物学国際高等コンファレンスに関する要望書について

前回の連絡会にて説明された国際高等シンポジウム『Okazaki Biology Conference (仮称)』について、基礎生物学研究所の村田紀夫教授より同シンポジウムの発足に関する要望書の文案が提示された。すでに多くの学会から支持が表明されており、議論の結果、若干の文章の変更の後、連合として文部科学大臣に提出することが了承された。

議題2．研究体制に関する提言

日本生化学会の村松喬会長より、平成15年2月に同学会が文部科学省等関連諸機関に提出した「研究体制に関する提言」が披露された。連合としてもこの趣旨に賛同し、若干の加筆変更後、すみやかにしかるべき機関に訴えて行くことで合意した。

日本生化学会による「研究体制に関する提言」は以下の通り

日本生化学会では、研究体制検討委員会を設け、日本の科学研究を質的に向上させるための方策を討議してきた。本年度(註：平成14年度)は、日本育英会の廃止、独立行政法人への移管、21世紀 COE プログラムなど、様々な施策が提示され見直されつつある大学院生への経済支援問題、ポストドクター一人計画完了後、雇用情勢が深刻さを増しつつある「ポストポストドク問題」、そして日本の科学研究の根幹を担う科学研究費、以上の3点について、改善策を提言する。本提言が科学政策立案の参考になることにより、質の高い研究成果がより多く生み出され、科学技術創造立国としての我が国の地位がさらに向上することを願う。

大学院生への経済支援について

1. 奨学生の採用に際しては、両親の家計を採用基準にせず、学生の経済状況、能力に基づいて行なう。授業料免除についても同様の考え方が必要である。
2. 優秀な学生に対して奨学金を卒業時に返還免除する制度は、学生のインセンティブを引き出す上で現実的な良案である。学生を評価する際には明確な基準を公表し、公平な評価をする。
3. COE や科研費のような競争的研究費から拠出して、

大学院生を研究支援員とし正当な報酬を払うことは、大学院生を研究や学業に専念させるための具体的な策であると評価する。これらに加え、大学を問わず、すべての学生が利用可能な現行の公募制度も量的に充実させ、大学間格差の拡大を防ぐ。

4. ティーチング・アシスタント(TA) やリサーチ・アシスタント(RA)は、給付額、採用枠ともにさらに充実させる。

ポストポストドク問題(ポストドクター終了後の就職問題)について

1. 現在ポストドクターの数は増加していて、日本の科学研究の質的量的向上に大いに貢献している。しかしながら助手ポストの削減もあって、ポストドクター終了後の雇用先は大きく不足しており、今後数年以内にポストドクターの就職問題が一段と深刻化する可能性が高い。このため、研究者が研究職のほかに社会の様々な場所で活躍の場を見つけることは不可欠になる。研究歴を持ち、高度な専門的知識を持った人々が多様な場に進出することは、科学研究と市民の距離を近付ける点で社会にとって望ましいことであり、研究者やポストドクターの地位の向上につながるであろう。したがって研究職以外の職に関する就職情報の窓口となる組織、機関の設置、産業界への働きかけなど、ポストドクターの就職支援を充実させる必要がある。
2. ポストドクターを始めとする研究者を採用する際には、年齢によって制限せず研究歴を基準にする。ポストポストドク問題の一因には、日本の研究者の流動性が乏しい点があると考えられる。任期制を含め研究者の流動性を高めるための施策を実施する。例えば転任すればするほど不利になる退職金制度など、研究者の流動性を阻害する要因となっている制度を改善する。

科学研究費について

1. 科学研究費は日本の科学研究の根幹を担う重要な研究費である。その基本である基盤研究費は、区分を問わず採択数および総額の倍増を計る。とくに、将来的に飛躍の可能性を秘めた研究の多くを支えている、年額500 - 1000万円の基盤研究(B)、および比較的小額ではあるが独立した研究者には必須の研究費である基盤研究(C)の二区分の採択数については、優先的に増やす。
2. 若手研究を除く基盤研究費の研究期間は3 ~ 5年を

基本とする。すべての基盤研究費の年限終了1年前における研究費の乗り換え申請を認める。

3. 研究費が年度を越えて使用できない現行の制度は、日本の研究の発展を阻害する要因であるとして、各方面から改善すべきとの意見が出されている。先に、研究費の年度越え使用を一部認める方針であるとの見解が科学技術政策担当大臣から出されたが、無条件に年度越え使用を許可すべきである。また研究費の細目(備品費、消耗品費、旅費等)を廃止し、一括して使用出来る様にする。

4. 現在研究基盤(S)と(A)の重複申請が認められているが、重複申請の適応範囲を、基盤研究(A)と(B)および基盤研究(B)と(C)にも広げる。また研究費の充足率を基盤研究(S)は約90%、それ以外は70-80%としているが、同じ比率にすべきである。

5. 研究費の審査に関して、プログラムオフィサー制度の充実化が計られようとしており、その意義は評価する。しかし、科学研究費審査員の選定がトップダウンで行われるのではないかと懸念がある。科学研究費審査員の選定は、本年度まで、日本学術振興会が日本学術会議の研究連絡委員会に審査員候補者の推薦を依頼し、これを基に進められてきた。日本生化学会をはじめとする多くの学会では、依頼に対応して、実際に研究を行っている一線の研究者の中から候補者を研究者同士の選挙で選出し、推薦してきた。今後も学会を通して研究者の意向を汲み上げるボトムアップの体制を維持すべきである。

平成15年2月10日

日本生化学会会長 村松 喬

議題5. その他 該当議題なし

以上

(文責(社)日本動物学会教育担当理事 松田良一)

平成15年度(社)日本動物学会 第2回理事会議事録

日 時:平成15年5月10日(土)

13時00分より14時00分まで

場 所:東京大学駒場16号館

出席者 理事 19名(委任状含む)、事務局長

山本庶務担当理事により、定款27条2項の規定により理事会が成立していることが報告された。

浅島会長により第2回理事会の開会宣言が行われた。

浅島会長が議長を務め、議事録署名人として山本博章庶務幹事、蟻川謙太郎会計幹事が推薦された承された。

報告事項

1. 会長報告

13日に開催される学術会議推薦人会議には浅島誠会員、佐藤矩行会員、八杉貞雄会員が出席する予定であることが報告された。

また先般打診があった生物学オリンピックへの参加は、時期尚早と判断し、本年度は参加を見合わせた旨、報告された。

2. 庶務報告

先般行われた科研費審査員候補者の推薦に関して報告があった。

3月17日に投票を締め切った科学研究費審査員予備者グループ作成のための選挙の投票数は245票であり、それをもとに、4月30日を締め切りとして評議員による投票を行ったこと。この投票に基づいて、次の候補者を選出したことが報告された。

1) 第2段審査員候補者

複合・新領域系

複合新領域分野

ゲノム科学分科

佐藤矩行(補欠 小原雄治)

資源保全学分科

毛利孝之(補欠 常木和日子)

議題3. 教科書WG経過報告

同WG副委員長の正木春彦氏(日本生化学会)による経過報告が連合世話人を通じて述べられた。さらに、本件のために申請していた科研費が2年間にわたり不採択となり作業に支障が出ている事等が紹介された。この件に関し、近日中に今後の進め方について連合世話人がWGと協議し、本年内の執筆開始をめざすことが了解された。

議題4. SPARC(The Scholarly Publishing & Academic Resources Coalition)について

事務局の山口哲男氏からSPARCに関する最近の動向について説明があった。

生物系

生物学分野

基礎生物学学科

形態・構造細目関連

筒井和義(補欠 浦野明央)

動物生理・行動細目関連

神谷 律(補欠 安藤正昭)

生物多様性・分類細目関連

馬渡駿輔, 西川輝昭(補欠 雨宮昭南)

生物科学学科

(進化生物学細目関連)

八杉貞雄(補欠 斎藤成也)

2) 第1段階審査員候補者

複合・新領域系

複合新領域分野

ゲノム科学学科

基礎ゲノム科学細目

分割 A (基礎ゲノム生物学)

堀 寛, 颯田葉子(補欠 山本博章)

分割 B (基礎ゲノム情報科学)

五條堀孝, 阿形清和(補欠 酒泉 満)

資源保全学学科

分割 A (生物保全学)

井口泰泉, 玉手英利(補欠 戸田正憲)

生物系

生物学分野

基礎生物学学科

形態・構造細目

中村正久, 高橋純夫, 高橋孝行

(補欠 高橋三保子)

動物生理・行動細目

高畑雅一, 藤 義博, 沼田英治

真行寺千佳子(補欠 小泉 修)

生物多様性・分類細目

片倉晴雄, 小松美英子, 武田正倫

大塚 攻, 小林幸正, 多田内修

(補欠 大高明史, 西田 睦)

生物科学学科

発生生物学細目

安部眞一, 西田宏記(補欠 岩尾泰宏)

進化生物学細目

浅見崇比呂(補欠 倉谷 滋)

3. 動物学推進将来計画担当理事報告

長濱動物学推進将来計画担当理事より活動報告があり, 安部眞一, 片倉晴雄, 武田洋幸, 寺北明久各会員を加えたワーキンググループを編成し, 本会のさらなる活性化案を検討中であること, それについてはシンポジウムの開催, アジアの動物学会関連の学協会の活動への積極的な参加さらには図書の出版等を検討中であることが報告された.

4. 渉外担当理事報告

八杉渉外担当理事より, 生物科学学会連合の会に松田理事が出席の予定であること, また, 現在基礎生物学研究所を中心に計画されている国際高等シンポジウム『Okazaki Biology Conference (仮称)』の実現に向けて, 本会を含め学会連合に参加している各学会から要望書を出す予定であることが報告された.

5. 広報委員会報告

窪川広報担当理事から, 席上配布資料に基づき, 3件の関連する報告があった. まず4月14日に開かれた本会ホームページ委員会の報告がおこなわれ, 生物学ニュースへの最近のアクセス状況の解析が説明された. PDF版, HTML版とも, 毎回の公開時には, その後の一ヶ月間でのアクセス件数は, それぞれに対してほぼ500件程度, 併せて1000人ぐらいが当該ニュースを閲覧していることが説明された. 次に科研費に関するアンケート結果を公表する予定であること, さらに本会主催で7月12日(土)に学術講演会「どうなる, 三宅島の自然? - その後 -」を, 立教大学池袋キャンパスで開く予定であることが報告された.

6. ガイアリスト21計画委員会報告

佐藤副会長より過去半年間の活動報告が行われた. 本会会員の申請した関連する科研費の採択状況ならびに, 会員が研究に利用している動物のリストを作成し, 実験材料として提供可能な動物等の情報も整備する予定であることが報告された.

7. 歴史資料保存委員会

玉手評議員より席上配付資料を基に活動報告があり, 動物学雑誌, 彙報, Zoological Science のデータベース化を計画し, そのための科研費申請を行い, 採択されたこと(期間は平成15年度中), また当該の作業を進めるに際して, 会員の協力が要請された.

8. 男女共同参画委員会報告

大島評議員から, 席上配付の資料を基に, 当該委員会の委員の構成が紹介された. 大島範子会員を委員長

とし、岡 良隆、向後晶子、佐藤 恵、千葉和義、成瀬真弓、光永敬子、鷲谷節子会員から構成され、大島、鷲谷、向後の3会員は男女共同参画学協会連絡会にも委員として参加していることが報告された。この連絡会に加盟する19学会がアンケート調査を計画中であることが説明された。

9. 大会準備委員会報告

平成15年度第74回大会（函館）準備状況報告

山下理事より函館大会の準備が順調に進んでいる旨、報告があった。登録は5月28日から6月18日までであること、また今回は口演を多くする予定であること等の説明があった。

平成16年度第75回（神戸）大会準備状況報告

道之前理事より神戸大会の準備状況報告があり、会期は9月10日（金）から12日（日）まで、ポスターの一般発表とシンポジウムを中心に行い、口演による一般発表は行わない予定である等、説明があった。

・ 審議事項

1. 第1号議案 定款改正について

山本庶務幹事より、定款第4章第16条の2項を改正し、支部長を理事とする案件が説明されたが、関連する細則の変更も必要であり、各支部において討論する必要も指摘され、再度、定款および細則の改正案を提起し、次回理事会までに各支部で検討を行うこととした。

2. 第2号議案 2004年度からの ZS 海外委託販売会社選定について

本件について、学会事務センターに委託する案が諮られ、1年ごとの契約見直しを行う予定であること等、その説明が永井事務局長より行われた。提案は原案通り可決された。

3. 第3号議案 感謝状贈呈に

大内一夫氏（両生類供給業者）と信太郎氏（北海道大学水産学部忍路臨海実験所、元技術補佐員）に本会より感謝状を贈呈する案が諮られた。席上配布資料をもとに、大内氏については中村理事が、また信太郎氏については馬渡理事から説明があり、本提案は原案通り可決された。

4. 第4号議案 電子ジャーナル担当理事を設けることについて

今後の学会誌発行に関して、電子ジャーナルとしての Zoological Science の形態を検討すべく、本件を専

門とする理事職の新設が諮られ、了承された。さらに当該理事には岡良隆会員が適当との意見の一致が得られた。次回の総会で承認を受けるべく、次の評議員会に提案することとなった。

5. 第5号議案 支部会計を本部会計と合算する件について

永井事務局長より、席上配布資料を用いて、税務署による各学協会に対する「収益事業調査」が開始されていること、また本会が「収益事業届け」を提出するには本部支部会計合算の状況を整えておく必要性が説明され、了解された。

6. 第6号議案 名誉会員の推薦について

浅島会長より名誉会員選考内規案が提議され、討議の結果、次の内規案を評議員会に諮ることとした。

名誉会員選考内規（案）

(ア) 日本動物学会の活動に多大な貢献をし、動物学の分野における功績が顕著である会員。

(イ) 名誉会員は評議員会の議を経て、総会で決定する。

7. 第7号議案 宿泊費に関して

浅島会長より、本会が会議等で会員に宿泊費を支出する場合は、上限を一泊8500円とする案が諮られた。提案は原案通り可決された。

第3回理事会は、9月16日（火）に開催される予定である。

以上

定款30条の規定により、議長及び議事録署名人により以上の議事を認め署名する。

平成15年5月10日

議長	浅島 誠
議事録署名人	山本 博章
議事録署名人	蟻川謙太郎

平成15年度第2回評議員会議事録

日 時：平成15年5月10日（土）

14時10分より17時10分まで

場 所：東京大学駒場16号館

出 席：評議員31名（委任状含む）

山本庶務幹事より定足数を満たしていることが報告された。

浅島会長により開会宣言が行なわれた。
神谷律評議員が議長に選出された。
神谷議長により、議事録署名人として山本博章庶務幹事、蟻川謙太郎会計幹事が推薦された承された。

・ 報告事項

1. 会長報告

13日に開催される学術会議推薦人会議には浅島誠会員、佐藤矩行会員、八杉貞雄会員が出席する予定であることが報告された。

また先般打診があった生物学オリンピックへの参加は、時期尚早と判断し、本年度は参加を見合わせた旨、報告された。

2. 庶務報告

先般行われた科研費審査員候補者の推薦に関して報告があった。

3月17日に投票を締め切った科学研究費審査員予備者グループ作成のための選挙の投票数は245票であり、それをもとに、4月30日を締め切りとして評議員による投票を行ったこと。この投票に基づいて、次の候補者を選出したことが報告された。

1) 第2段審査員候補者

複合・新領域系

複合新領域分野

ゲノム科学分科

佐藤矩行(補欠 小原雄治)

資源保全学分科

毛利孝之(補欠 常木和日子)

生物系

生物学分野

基礎生物学分科

形態・構造細目関連

筒井和義(補欠 浦野明央)

動物生理・行動細目関連

神谷 律(補欠 安藤正昭)

生物多様性・分類細目関連

馬渡駿輔, 西川輝昭(補欠 雨宮昭南)

生物科学分科

(進化生物学細目関連)

八杉貞雄(補欠 斎藤成也)

2) 第1段審査員候補者

複合・新領域系

複合新領域分野

ゲノム科学分科

基礎ゲノム科学細目

分割A(基礎ゲノム生物学)

堀 寛, 颯田葉子(補欠 山本博章)

分割B(基礎ゲノム情報科学)

五條堀孝, 阿形清和(補欠 酒泉 満)

資源保全学分科

分割A(生物保全学)

井口泰泉, 玉手英利(補欠 戸田正憲)

生物系

生物学分野

基礎生物学分科

形態・構造細目

中村正久, 高橋純夫, 高橋孝行

(補欠 高橋三保子)

動物生理・行動細目

高畑雅一, 藤 義博, 沼田英治

真行寺千佳子(補欠 小泉 修)

生物多様性・分類細目

片倉晴雄, 小松美英子, 武田正倫

大塚 攻, 小林幸正, 多田内修

(補欠 大高明史, 西田 睦)

生物科学分科

発生生物学細目

安部眞一, 西田宏記(補欠 岩尾泰宏)

進化生物学細目

浅見崇比呂(補欠 倉谷 滋)

3. 動物学推進将来計画担当理事報告

長濱動物学推進将来計画担当理事より活動報告があり、安部眞一、片倉晴雄、武田洋幸、寺北明久各会員を加えたワーキンググループを編成し、本会のさらなる活性化案を検討中であること、それについてはシンポジウムの開催、アジアの動物学会関連の学協会の活動への積極的な参加さらには図書の出版等を検討中であることが報告された。

4. 渉外担当理事報告

八杉渉外担当理事より、生物科学学会連合の会に松田理事が出席の予定であること、また、現在基礎生物学研究所を中心に計画されている国際高等シンポジウム『Okazaki Biology Conference(仮称)』の実現に向

けて、本会を含め学会連合に参加している各学会から要望書を出す予定であることが報告された。

5. 広報委員会報告

窪川広報担当理事から、席上配布資料に基づき、3件の関連する報告があった。まず4月14日に開かれた本会ホームページ委員会の報告がおこなわれ、生物科学ニュースへの最近のアクセス状況の解析が説明された。PDF版、HTML版とも、毎回の公開時には、その後の一ヶ月間でのアクセス件数は、それぞれに対してほぼ500件程度、併せて1000人ぐらいが当該ニュースを閲覧していることが説明された。次に科研費に関するアンケート結果を公表する予定であること、さらには本会主催で7月12日(土)に学術講演会「どうなる、三宅島の自然? - その後 - 」を、立教大学池袋キャンパスで開く予定であることが報告された。

6. ガイアリスト21計画委員会報告

佐藤副会長より過去半年間の活動報告が行われた。本会会員の申請した関連する科研費の採択状況ならびに、会員が研究に利用している動物のリストを作成し、実験材料として提供可能な動物等の情報も整備する予定であることが報告された。

7. 歴史資料保存委員会

玉手評議員より席上配布資料を基に活動報告があり、動物学雑誌、彙報、Zoological Scienceのデータベース化を計画し、そのための科研費申請を行い、採択されたこと(期間は平成15年度中)、また当該の作業を進めるに際して、会員の協力が要請された。

8. 男女共同参画委員会報告

大島評議員から、席上配布の資料を基に、当該委員会の委員の構成が紹介された。大島範子会員を委員長とし、岡良隆、向後晶子、佐藤恵、千葉和義、成瀬真弓、光永敬子、鷲谷節子会員から構成され、大島、鷲谷、向後の3会員は男女共同参画学協会連絡会にも委員として参加していることが報告された。この連絡会に加盟する19学会がアンケート調査を計画中であることが説明された。

9. 大会準備委員会報告

平成15年度第74回大会(函館)準備状況報告

山下理事より函館大会の準備が順調に進んでいる旨、報告があった。登録は5月28日から6月18日までであること、また今回は口演を多くする予定であること等の説明があった。

平成16年度第75回(神戸)大会準備状況報告

道之前理事より神戸大会の準備状況報告があり、会期は9月10日(金)から12日(日)まで、ポスターの一般発表とシンポジウムを中心に行い、口演による一般発表は行わない予定である等、説明があった。

. 審議事項

1. 第1号議案 第3回「日本動物学会 女性研究者奨励OM賞」について

星元紀選考委員長より、席上配付資料に基づいて、下記2名の受賞候補者の紹介があり、H15年度のOM賞受賞者として了承された。

箕浦高子(筑波大生命・情報等研究支援室、文部科学技官)

「テトラヒメナ新規アクチン関連タンパク質(tArp)の繊毛形成における機能」

藤原宏子(日本女子大学理学部、非常勤講師)

「鳥類の音声記憶は脳のどこに貯蔵されているか」

またこの賞の募集要項に関して、応募規定、広報さらには受賞者からの報告を要望する案が出され、承認された。

2. 第2号議案 動物学会論文賞について

道端齊編集主幹に代わり、筒井和義理事から席上配付資料に基づき論文賞候補論文が紹介され、審議を経て決定された。論文賞候補論文は以下の通りである。なお4)については同一グループの一連の報告であり、3報を一続きの論文として受賞対象とされた。

1) Genri Kawahara, Kiyoshi Terakado, Toshio Sekiguchi, Kinji Inoue and Sakae Kikuyama (2002) Adrenocorticotropin-Like Immunoreactivity in the Granules of Neural Complex Cells of the Ascidian *Halocynthia roretzi*. Zool. Sci. 19: 1061-1065.

2) Taishi Yoshii, Makoto Sakamoto and Kenji Tomioka (2002) A Temperature-Dependent Timing Mechanism is involved in the Circadian System that Drives Locomotor Rhythms in the Fruit Fly *Drosophila melanogaster*. Zool. Sci. 19: 841-850.

3) Hideki Abe and Yoshitaka Oka (2002) Mechanisms of the Modulation of Pacemaker Activity by GnRH Peptides in the Terminal Nerve-GnRH Neurons. Zool. Sci. 19: 111-128.

4) Kazuya Kobayashi and Motonori Hoshi (2002) Switching from Asexual to Sexual Reproduction in

the Planarian *Dugesia ryukyuensis*: Change of the Fissiparous Capacity along with the Sexualizing Process. Zool. Sci. 19: 661-666.

Kazuya Kobayashi, Sachiko Arioka, Sumitaka Hase and Motonori Hoshi (2002) Signification of the Sexualizing Substance Produced by the Sexualized Planarians. Zool. Sci. 19: 667-672.

Kazuya Kobayashi, Sachiko Arioka and Motonori Hoshi (2002) Seasonal Changes in the Sexualization of the Planarian *Dugesia ryukyuensis*. Zool. Sci. 19:1267-1278.

5) Makoto Hiroi, Frédéric Marion-Poll and Teiichi Tanimura (2002) Differentiated Response to Sugars among Labellar Chemosensilla in *Drosophila*. Zool. Sci. 19: 1009-1018.

6) Atsushi Kimura, Hitoshi Matsui and Takayuki Takahashi (2002) Expression and Localization of Prolyl Oligopeptidase in Mouse Testis and Its Possible Involvement in Sperm Motility. Zool. Sci. 19: 93-102.

3 . 第 3 号議案 江上基金 (若手研究者国際会議出席費用補助金) 受賞者について

井出宏之学会賞等選考委員長より選考経過が説明され、次の 2 会員が推薦され、審議をへて受賞が決定された。

杉浦真由美 (奈良女子大・大学院人間文化研究科)

4th European Congress of Protistology and 10th European Conference of Ciliate Biology に出席

日比野 拓 (東京大学・大学院新領域先端生命科学専攻)

Developmental Biology of the Sea Urchin XV 会議に出席

また国際会議での発表の内容、参加費用概算など、応募用紙の記載事項の変更が井出委員長より提案され了承された。

4 . 第 4 号議案 日本動物学会奨励賞について

井出宏之学会賞等選考委員長より選考経過が説明され、次の 2 会員が推薦され、審議をへて受賞が決定された。

坂本竜哉 (岡山大学・理学部)

硬骨魚類の環境適応機構の分子細胞生理学的研究

吉田 学 (科学技術振興事業団 国際共同事業・カル

シウム振動プロジェクト)

卵による精子の活性化・誘引機構の研究

5 . 第 5 号議案

井出宏之学会賞等選考委員長より西田宏記会員が推薦され、その選考経過が説明された。審議をへて西田会員の受賞が決定された。

西田宏記 (大阪大学・大学院理学研究科)

ホヤ初期胚発生過程における発生運命決定機構の解析

6 . 第 6 号議案 定款改正について

浅島会長より、定款第 4 章第 16 条の 2 項を改正し、「支部長を理事とする」案件が説明され、承認された。関連する細則の変更については、本部の原案を後日各支部に連絡し、次回評議員会までに各支部で検討することになった。

7 . 第 7 号議案 2004 年度からの ZS 海外委託販売会社選定について

本件について、学会事務センターに委託する案が諮られ、1 年ごとの契約見直しを行う予定であること等、その説明が浅島会長および永井事務局長により行われた。提案は原案通り可決された。

8 . 第 8 号議案 感謝状贈呈に

大内一夫氏 (両生類供給業者) と信太和郎氏 (北海道大学水産学部忍路臨海実験所、元技術補佐員) に本会より感謝状を贈呈する案が諮られた。席上配布資料をもとに、大内氏については菊山栄評議員が、また信太氏については山下正兼評議員 (支部長および理事) から説明があり、本提案は原案通り可決された。

9 . 第 9 号議案 電子ジャーナル担当理事を設けることについて

今後の学会誌発行に関して、電子ジャーナルとしての Zoological Science の形態を検討すべく、本件を専門とする理事職の新設が諮られ、了承された。さらに当該理事には岡良隆会員が適当との意見の一致が得られた。次回の総会での承認が必要である。

10 . 第 10 号議案 支部会計を本部会計と合算する件について

永井事務局長より、席上配付資料を用いて、税務署による各学協会に対する「収益事業調査」が開始されていること、また本会が「収益事業届け」を提出するには本部支部会計合算の状況を整えておく必要性が説明され、了解された。

11. 第11号議案 名誉会員の推薦について
浅島会長より名誉会員選考内規案が提議され、審議の結果、次の内規を設けることとなった。

名誉会員選考内規

1. 日本動物学会の活動に多大な貢献をし、動物学の方野における功績が顕著である会員。
 2. 名誉会員は評議員会の議を経て、総会で決定する。
12. 第12号議案 宿泊費に関して
浅島会長より、本会が会議等で会員に宿泊費を支出する場合は、上限を一泊8500円とする案が諮られた。提案は原案通り可決された。

第3回評議員会は、9月16日(火)に開催される予定である。

以上

定款30条の規定により、議長及び議事録署名人により以上の議事を認め署名する。

平成15年5月10日

議長	神谷 律
議事録署名人	山本 博章
議事録署名人	蟻川謙太郎

会員異動

所属支部番号

1. 北海道, 2. 東北, 3. 関東, 4. 中部, 5. 近畿, 6. 中国・四国
7. 九州, 8. 海外

新入会 (6 / 10日現在)

古波津 創 (2; 980-8579 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉09 東北大学大学院情報科学研究科システム情報科学専攻生体システム情報学講座情報生物学分野井樋研究室)/ 萱嶋泰成 (3; 223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1 慶応義塾大学法学部生物学教室秋山研究室)/ 三原基広 (3; 305-8572 つくば市天王台1-1-1 筑波大学生物科学系第六実験室宮崎研究室)/ 本城繁幸 (7; 808-0196 福岡県北九州市若松区ひびきの2番4号 九州工業大学大学院生命体工学研究科脳情報専攻神経情報処理講座行動発現機構研究室)/ 能丸恵理子 (5; 656-2401 兵庫県津名郡淡路町岩屋2746神戸大学内海域機能教育研究センター 神戸大学自然科学研究科生物学専攻系統発生学教室村上研究室)/ 唐澤幸司 (6; 739-8526 広島県東広島市鏡山1-3-1 広島大学理学研究科数理分子生命理学専攻分子遺伝学研究室)/ 前澤一樹 (3; 113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院理学系研究科・生物科学専攻・細胞生理化学研究室)/ 村田未果 (5; 658-8501 神戸市東灘区岡本8丁目9-1 甲南大学理工学部生物学科園部研究室)/ 水谷賢史 (3; 223-8352 神

奈川県横浜市港北区日吉3-14-1 慶應義塾大学大学院理工学研究科基礎理工学専攻生命理工学専修研究室)/ 岡田行栄 (5; 558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学大学院理学研究科動物機能生物学研究室)/ 渡辺要平 (6; 739-8521 広島県東広島市鏡山1-7-1 広島大学総合科学部総合生理学研究室)/ 栗原善宏 (1; 041-8611 北海道函館市港町3丁目1番1号 北海道大学大学院水産科学研究科生命資源科学専攻育種生物学講座)/ 大山敦子 (1; 060-0810 北海道札幌市北区北10条西8丁目 北海道大学大学院理学研究科生物科学専攻生体情報分子学講座)/ 山下祐司 (3; 228-8555 神奈川県相模原市北里1-15-1 北里大学大学院基礎生命科学研究科分子発生学講座)/ 吉野 潤 (1; 060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 北海道大学大学院理学研究科生物科学専攻系統進化学講座3)/ 堀 沙耶香 (3; 113-0033 文京区本郷7-3-1 東京大学理学系研究科生物科学専攻細胞生理化学研究室)/ 羽田幸祐 (3; 113-0033 文京区本郷7-3-1 東京大学理学系研究科生物科学専攻生体情報学研究室)/ 工藤秀明 (7; 807-8555 福岡県北九州市八幡西区医学生ヶ丘1-1 産業医科大学医学部第2解剖学講座)/ 加藤智美 (3; 228-8555 神奈川県相模原市北里1-15-1 北里大学・一般教育部・自然科学教育センター・生物学研究室)/ 川 たまみ (3; 169-0051 早稲田大学教育学部生物学教室)/ 小林 大 (3; 156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40 日本大学文理学部化学科生物化学研究室)/ 平松宏明 (3; 192-0397 東京都八王子市南大沢1-1 東京立大学大学院理学研究科生物科学専攻発生プログラム研究室)/ 宮園貞治 (5; 560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-1 大阪大学大学院生命機能研究科河村研究室)/ 金澤希 (5; 663-8501 兵庫県西宮市武庫川町1-1 兵庫医科大学先端医学研究所発生生殖部門)/ 宇ノ木佐会 (2; 980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学大学院生命科学研究科生命機能科学専攻微小脳解析分野水波研究室)/ 坂岡 賢 (4; 455-0033 名古屋港区港町1-3 財団法人名古屋港水族館飼育部飼育第一課)/ 丸山賢治 (3; 305-8572 茨城県つくば市天王台1-1-1 筑波大学生物農林学系棟6実験室 筑波大学生物科学系第六実験室宮崎研究室)/ 有信大輔 (5; 560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-1 大阪大学大学院生命機能研究科生命機能専攻ナノ生体科学講座河村研究室)/ 宮崎洋祐 (5; 558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学大学院理学研究科生物地球系専攻情報生物学研究室)/ 宇高寛子 (5; 558-8585 大阪市住吉区杉本3丁目3-138 大阪市立大学大学院理学研究科生物地球系専攻情報生物学研究室)/ 若田裕香 (4; 422-8529 静岡市大谷836 静岡大学理工学研究科生物地球環境科学専攻生物機能科学講座石川・徳元研究室)/ 松尾 桂 (1; 060-0810 北海道札幌市北区北10条西8丁目 北海道大学大学院理学研究科生物科学専攻生体情報分子学講座)/ 吉田 寛 (1; 060-0810 北海道札幌市北区北10条西8丁目 北海道大学大学院理学研究科生物科学専攻生体情報分子学講座)/ 近藤江里 (2; 980-0845 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉 宮城教育大学大学院理科教育専修出口研究室)/ 李載みん (3; 305-8634 茨城県つくば市大わし1-2 農業生物資源研究所発生分化研究グループ発生機構研究チーム)/ 堀口 勉 (5; 558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学大学院理学研究科生物地球系情報生物学研究グループ)/ 本田 誠 (3; 197-0814 東京都八王子市宮下町476 杏林大学保健学部環境生命科学教室)/ 藤山朋代 (3; 153-8902 東京都目黒区駒場3-8-13号館013B 東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻松田研究室)/ 西尾知子 (4; 930-8555 富山県富山市五福3190 富山大学大学院理工学研究科生物学専攻生体制御学講座内山研究室)/ 鈴木知晴 (3; 192-8508 東京都八王子市宮下町476 杏林大学保健

学部環境生命科学教室)/ 粟津智子 (5 ; 606-8502 京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院理学研究科動物学教室分子・進化発生生物学研究室)/ 小林宏行 (5 ; 560-0001 豊中市待兼山町1-1 大阪大学理学研究科宇宙地球科学専攻徳永研究室)/ 平林奈保子 (3 ; 112-8610 東京都文京区大塚2-1-1 お茶の水女子大学理学部生物学根本研究室)/ 渡辺 恵 (3 ; 113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院薬学系研究科神経生物物理学教室)/ 鶴留一也 (7 ; 808-0196 福岡県北九州市若松区ひびきの2番4号 九州工業大学大学院生命工学研究科脳情報専攻松本研究室)/ 清水由梨 (3 ; 112-8610 東京都文京区大塚2-1-1 お茶の水女子大学理学部生物学根本研究室)/ 片野 泉 (5 ; 630-8506 奈良市北魚屋西町 奈良女子大学人間文化研究科)/ 佐野順司 (4 ; 467-8501 名古屋市瑞穂区瑞穂町山の畑1 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科加藤研究室)/ 石倉 亮 (3 ; 274-8510 千葉県船橋市三山東邦大学理学部 東邦大学大学院理学研究科生物分子専攻分子生理学部門大島教室)/ 新宅未笛 (3 ; 305 8572 茨城県つくば市天王台1-1-1 筑波大学生物科学系D408 筑波大学生物科学系第6実験室(D408))/ 中口 梓 (3 ; 183-8509 東京都府中市幸町3-5-8 東京農工大学大学院連合農学研究科生物生産学専攻応用昆虫学研究室)/ 川崎広明 (3 ; 274-8510 千葉県船橋市三山2-2-1 東邦大学理学部生物学科生体調節学研究室)/ 小林大輔 (2 ; 980-8579 仙台市青葉区荒巻字青葉09 東北大学大学院情報科学研究科情報生物学分野)/ 桜井啓輔 (5 ; 606-8502 京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院理学研究科生物科学専攻生物物理学教室七田研究室)/ 川道穂津美 (5 ; 722-0073 広島県御調郡向島町2445 広島大学大学院理学研究科附属臨海実験所)/ 李 政勲 (7 ; 812-8581 福岡市東区箱崎6丁目10番1号 九州大学大学院農学研究院動物昆虫学講座動物学分野: 訪問研究員)/ 池田 譲 (3 ; 351-0198 埼玉県和光市広沢2-1 理化学研究所脳科学総合研究センター脳創成表現研究チーム)/ 藤山直之 (1 ; 040-8567 北海道函館市八幡町1番2号 北海道教育大学教育学部函館校理科教育講座生物学教室)/ 赤塚直哉 (3 ; 156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40 日本大学大学院総合基礎科学研究科相関理化学専攻生物化学研究室)/ 武田真希 (4 ; 930-8555 富山県富山市五福3190 富山大学理学研究科生物学専攻生体制御学講座小松美英子研究室)/ 漆山登喜 (3 ; 305-8572 茨城県つくば市天王台1-1-1 筑波大学大学院修士課程バイオシステム研究科バイオシステム専攻進化発生学研究室)/ 鈴木大輔 (4 ; 464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町 名古屋大学大学院生命農学研究科生物圏資源学専攻生物圏動態論講座動物管理学研究室)/ 会沢洋一 (3 ; 169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学教育学部生物学教室加藤尚志研究室)/ 沓掛磨也子 (3 ; 305-8566 つくば市東1-1-1 中央第6 産業技術総合研究所・第6事業所・生物機能工学部門・深津グループ)/ 松田有未 (1 ; 069-8501 北海道江別市文京台緑町582 酪農学園大学大学院酪農学研究科酪農学専攻遺伝・育種学研究室)/ 金 宗潤 (3 ; 305-8666 つくば市観音台3-1-1 中央農業総合研究センター計測制御研 (JSTPRESTO))/ 奥村栄朗 (3 ; 305-8687 茨城県つくば市松の里1 独立行政法人森林総合研究所野生動物研究領域鳥獣生態研究室)/ 森田明広 (5 ; 545-8585 大阪市阿倍野区旭町1-4-3 大阪市立大学大学院医学研究科老年医科学大講座脳神経科学研究室)/ 角田幸子 (3 ; 143-8540 東京都大田区大森西5-21-16 東邦大学医学部解剖学第一講座)/ 佐藤 淳 (6 ; 729-0292 広島県福山市学園町1番地三蔵 福山大学生命工学部生物工学科動物細胞工学研究室)/ 高嶋 聡 (1 ; 135-0064 札幌市北区北10条西8丁目 北海道大学大学院理学研究科行動知能学講

座)/ 中川由貴子 (6 ; 700-8530 岡山市津島中3-1-1 岡山大学理学部生物科学科生殖内分泌研究室)/ 西野由美子 (4 ; 424-8610 静岡県静岡市清水折戸3-20-1 東海大学大学院海洋学研究科海洋生物学専攻中辻研究室)/ 下井利修 (3 ; 223-8522 神奈川県横浜市港北区日吉3-14-1 慶應義塾大学大学院理工学研究科基礎理工学専攻生命工学専攻研究室)/ 佐々木康成 (6 ; 739-8526 東広島市鏡山1-3-1 広島大学大学院理学研究科生物科学専攻情報生理学)/ 幸田正典 (5 ; 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学理学部生物)/ 板原裕一 (3 ; 359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15 早稲田大学大学院人間科学研究科生命科学専攻細胞生物学研究室)/ 坂本真理子 (7 ; 860-8555 熊本市黒髪2丁目39番1号 熊本大学大学院自然科学研究科環境適応学研究室)/ 筒井康貴 (5 ; 651-2492 神戸市西区岩岡町岩岡588-2 姫路工業大学理学研究科生命科学専攻(連携大学院・通信総合研究所・生体物性グループ))/ 奥 宏海 (4 ; 516-0193 三重県度会郡南勢町中津浜浦422-1 水産総合研究センター養殖研究所)/ 石丸裕子 (6 ; 690-8504 島根県松江市西川津町1060 島根大学生物資源科学研究科生物科学専攻黒田研究室)/ 大月真理子 (6 ; 700-8530 岡山市津島中3-1-1 岡山大学理学部生物学科)/ 阿部道生 (3 ; 230-8501 神奈川県 鶴見大学歯学部生物学教室

住所・所属変更 (6 / 10日現在)

早川洋一 (1 3 ; 181-8585 東京都三鷹市大沢3-10-2 国際基督教大学・理学科・生物)/ 松島 治 (6 6 ; 731-5193 広島市佐伯区三宅二丁目1番1号 広島工業大学環境学部環境情報学科)/ 三宅顕三 (4 3 ; 424-8610 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻動物科学大講座分子発生)/ 岡崎登志夫 (4 4 ; 519-04 横浜市金沢区福浦2-12-4 独立行政法人中央水産研究所)/ 砂長 毅 (3 6 ; 780-8520 高知市曙町2-5-1 高知大学理学部1号館2階 高知大学理学研究科応用理学専攻物質機能科学講座生体情報相関科学分野川村研究室)/ 浜田麻友子 (3 5 ; 606-8502 京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院理学研究科動物学教室分子進化発生学研究室)/ 吉村建二郎 (4 3 ; 305-8572 つくば市天王台1-1-1 筑波大学生物科学系)/ 高野和敬 (2 3 ; 350-0495 埼玉県入間郡毛呂山町字毛呂本郷38 埼玉医科大学第二解剖学教室)/ 池内俊貴 (4 5 ; 526-0829 滋賀県長浜市田村町1266 関西文理総合学園長浜バイオ大学バイオサイエンス学部バイオサイエンス学科)/ 岡田龍一 (4 3 ; 113-0032 東京都文京区弥生1-1-1 東京大学分子生物学研究所高次構造)/ 中沢英夫 (3 ; 223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1 慶應義塾大学・医学部・生物学教室(長井研))/ 後藤利保 (3 ; 153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系浅島研究室)/ 坂本竜哉 (3 6 ; 701-4303 岡山県邑久郡牛窓町鹿忍130-17 岡山大学理学部付属牛窓臨海実験所)/ 日野瑞城 (6 3 ; 371-8511 群馬県前橋市昭和町三丁目39番22号 群馬大学医学部薬理学教室)/ 横山 仁 (8 ; WA98195 1750NE Pacific St., Seattle, WA98195, USA “ Dept. of Pharmacology, Box357750 RoomK-516, Univ. of Washington School of Medicine ”)/ 原田淑人 (3 4 ; 517-0004 三重県鳥羽市菅島町429-63 名古屋大学大学院理学研究科附属菅島臨海実験所)/ 小川麻里 (6 6 ; 739-0046 広島県東広島市鏡山3-10-32 財団法人ひろしま産業振興機構広島県産業科学技術研究所)/ 桑澤清明 (3 6 ; 700-0005 岡山市理大町1-1 岡山理科大学基礎理学科)/ 鈴木幸子 (3 3 ; 241 横須賀市平成町1-10-1 神奈川県立保健福祉大学・生物

学教室)/香川浩彦(4 7;516-01 宮崎市学園木花台西1丁目1番地422-1 宮崎大学農学部生物環境科学科水産科学講座)/伊藤篤子(3;238-0225 神奈川県川崎市幸区小倉144-8-I棟 慶應大学医学部分子生物学教室)/松崎真人(7 7;860 熊本市和泉町亀の甲325番地 熊本保健科学大学)/庄島圭介(5 7;869-4203 熊本県立氷川高等学校)/富岡憲治(6 6;700-8530 岡山市津島中3丁目1-1 岡山大学理学部生物学科)/仲村厚志(3;182-8585 東京都調布市調布ヶ丘1-5-1 電気通信大学電気通信学部量子物質工学科)/中嶋康裕(2 3;101-8360 東京都千代田区三崎町1-3-2 日本大学経済学部)/東藤 孝(3 1;041-8611 函館市港町3-1-1 北海道大学大学院水産科学研究科生命機能学講座)/白戸悠香子(3;153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系馬淵研究

室)/渡辺愛子(3 3;351-0198 埼玉県和光市広沢2-1 理化学研究所脳科学総合研究センター発声行動機構研究チーム)/山本大介(3;305-8634 茨城県つくば市大わし1-2 独立行政法人農業生物資源研究所発生分化研究グループ発生機構研究チーム)/炭谷めぐみ(5 3;192-0397 東京都八王子市南大沢1-1 東京都立大学大学院理学研究科生物学教室細胞遺伝学研究室(相垣研))/古山 昭(2;963-8611 福島県郡山市富田町字三角堂31-1 奥羽大学歯学部口腔生理学教室)/芋川 浩(5;650-0047 神戸市中央区港島南町2-2-3 理化学研究所・発生再生研究センター進化再生研究グループ)/福島康弘(3 3;108-8639 東京都港区白金4-6-1 東京大学医科学研究所実験動物研究施設(部門))/伊藤春樹(4;930-8555 富山県富山市五福3190 富山大学理学部生物圏環境科学科生物圏機能第三講座

「生物科学ニュース」の購読・ご利用のおすすめ

近年の生命科学の進歩はめざましく、新しい分野が次々と開かれ、その結果として新しい学会や雑誌が次々と設立・刊行されると共に、日々各種の会合がめまぐるしく催されております。もはや個々の学会や個人がこれらの情報を処理していける時期ではなくなってきております。

この時代に対処してゆくために「生物科学ニュース」は日本動物学会および日本植物学会の和文情報誌として、会員への情報伝達、広報はもちろん、生物学に関連した学会・国際会議・シンポジウム・講演会・研修会などの開催予定とプログラム、人事・研究助成金などの公募記事、書評、関連分野の動向などを中心に、幅広く生物科学関連ニュースをもりこみ編集・刊行されています。

「生物科学ニュース」は両学会の約5,000名の会員に配布されていますが、会員以外の個人の方あるいは機関でもご購読いただけます。この機会にぜひご購読くださいますようお願い申し上げます。ご送付先、お電話番号など明記のうえ下記あてハガキ、またはファックスなど書面でお申し込みくだされば折り返し請求書・振込用紙などお送り申し上げます。

記

「生物科学ニュース」 月刊（毎月20日発行）/ B5判 / 毎号平均22頁

編集・発行 生物科学ニュース編集委員会（日本動物学会・日本植物学会）

年間購読料 3,100円（税込・送料無料）

購読料は原則として年間前払いでお願いしております。

ご希望の月号からご購読いただけますが、1月号から12月号までの12冊を一期間としますため、途中月からのご購読の場合は初年度のみ月割の購読料となります（下の例示のとおり）。以降は購読中止のご連絡をいただかない限り翌年に自動継続し1月号から12月号のサイクルで更新させていただきます。

機関購読の場合はご送付先にご担当の個人名をお入れください。

お支払いに際し特定の書類が必要な場合は作成いたしますのでご連絡ください。

見本誌ご希望の場合はお送りいたします。

すでに購読ご登録の場合はご容赦下さい。

本年度購読料 3,100円 × 9 / 12 = 2,325円

次年度購読料 3,100円（年間購読料が改定された場合は別途ご案内します）

〒113-0021 東京都文京区本駒込5 - 16 - 9

財団法人 日本学会事務センター 事業部

「生物科学ニュース」係

TEL . 03-5814-5811 FAX . 03-5814-5822

関連記事掲載を御希望の方は、「生物科学ニュース」最新号を参照の上、記事を簡潔にまとめ、下記編集局宛にお送り下さい。編集委員会が関連記事と認めた場合には無料で掲載させていただきますが、様式の統一のため記事の手直しを行なうことがあります。なお、編集委員会では記事の要約表現の改訂を独自に行なうことがあります。また学会や研究会が独自の記事を出したい時には、その都度必要なスペース(“ひろば”欄)を買い切ることができます。“ひろば”の校正は買い切られた方をお願い致します。

料金：1ページ (2,000字) 40,000円

1/2ページ (1,000字) 20,000円

1/4ページ (500字) 10,000円

記事送付先：〒113-0033 東京都文京区本郷2-27-2 東真ビル 生物科学ニュース編集局

原稿をお送り下さる場合、以下の点にご留意下さい。

1) 生物科学ニュースに原稿をお送りいただく場合は、生物科学ニュース編集局 (bsnews@bsj.or.jp) に、電子メールの本文または添付書類(テキストファイル、マイクロソフトまたはアップルワークス書類に限る。ファイル名に拡張子を付ける。)で、Subject に「ニュース原稿」と記入の上、お送り下さい。フロッピーディスクを郵送いただいても結構です。なお、修飾文字や特殊文字をご使用の際は、同時にプリントアウトしたものをファックス(03-3814-6216)にてお送り下さい。図表等のファイルについては、予めご相談下さい。書式等は生物科学ニュース最新号をご参照下さい。

2) 現在のところ、書評欄への投稿は受けつけておりません。

3) 掲載原稿の締切日(必着)は以下の通りです。

No.381 2003年9月号 2003年7月14日(月)

No.382 2003年10月号 2003年8月11日(月)

No.383 2003年11月号 2003年9月8日(月)

No.384 2003年12月号 2003年10月14日(火)

No.385 2004年1月号 2003年11月17日(月)

No.386 2004年2月号 2003年12月1日(月)

No.387 2004年3月号 2004年1月12日(月)

運営委員会

社団法人 日本動物学会 蟻川謙太郎・久保英夫・窪川かおる (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/zsj/>)

社団法人 日本植物学会 杉山宗隆・作田正明・米田好文 (<http://bsj.or.jp/>)

編集委員会

社団法人 日本植物学会 青木誠志郎・澤 進一郎・中西 史・矢部尚登・作田正明 (幹事)

社団法人 日本動物学会 小畑秀一・鈴木 忠・服田昌之・吉田 学・久保英夫 (幹事)

発行 (社)日本動物学会・(社)日本植物学会 生物科学ニュース編集委員会 〒113-0033 東京都文京区本郷2-27-2
東真ビル / FAX 03-3814-6216

印刷 昭和情報プロセス株式会社 〒108-0073 東京都港区三田5-14-3 TEL 03-3452-8451

購読申込:(財)日本学会事務センター事業部 / 〒113-0021 東京都文京区本駒込5-16-9 学会センターC21
TEL 03-5814-5811 FAX 03-5814-5822
